

松竹劇団新派の名俳優 瀬戸摩純さんに聴く

どんな状況でも妥協せず 観客を魅了し続ける秘訣とは

今月は現代演劇の元祖といわれている「新派」のお芝居で大人気の俳優、瀬戸摩純さんにご登場いただきます。

新派の歴史や演劇の魅力、コロナ禍の大打撃を試行錯誤しながら乗り越えたお話、そして、ビジネスのヒントにもなる顧客とのコミュニケーションを途切れさせないことの大切さなどについて伺いました。



瀬戸さんは、松竹劇団新派に所属の俳優です。

新派の誕生は諸説ありますが、一般的には1888（明治21）年12月とされていて、今年で、創設137年の歴史があります。

「新派は芝居といえば歌舞伎しかなかった明治時代に始まりました。歌舞伎（旧派）に対して現代劇であるという意味合いから『新派』といわれた芝居です」（瀬戸さん：以下同）

新派誕生の背景には、若い士族たちの存在がありました。その士族たちは自由民権を訴える「自由党壮士」と呼ばれ、不満や主張を芝居の中に組み込んで「壮士芝居」を旗揚げします。当時、川上音二郎が制作し、一世を風靡したオッペケペー節は、社会批判や皮肉を込めた「世界初のラップ」として有名ですが、このように歌や芝居に民衆の声を乗せるのが流行った時代でした。初めは、政治色が強かった新派の芝居ですが、中流の女性読者を対象に読まれるべく書かれた新聞の連載小説を題材に取り上げるようになり、人気となっていきます。「不如帰（ほととぎす）」「金色夜叉」「婦系図（おんなけいず）」からなる「新派三大悲劇」も生まれ、花柳章太郎・水谷八重子・京塚昌子ら数々の名優を輩出。“ホームドラマ”というジャンルは新派から誕生しました。



京都島原の花魁「太夫さん（こったいさん）」を演じたときの1枚

音楽教師を目指していた少女は、玉三郎さんとの出会いで新派へ

瀬戸さんが新派俳優を志したのは、高校3年生のときだそうです。幼い頃から活動的なタ

イプで、日本舞踊や茶道の他に、水泳、マラソン、テニス、ピアノ、フルート、ドラムなどにも精を出し、高校3年間はマーチングバンド部で全国大会優勝を目指していたという瀬戸さん。高校卒業後は大学に通って、音楽の教師を目指すつもりでいたそうです。

ところが、踊りのお稽古場に行ったときのこと。偶然にも歌舞伎俳優の坂東玉三郎さんが現れたのだといいます。

「私が先に終わってありがとうございましたと帰ろうとしたところに入っていたのですよ。あっ、玉三郎さんだとドキドキしました。その後、お家元から玉三郎さんが『あの娘、新派向きね』と話されていたとお聞きしました。玉三郎さんがおっしゃるならそうなのかしら？と、進学先への願書の提出をやめて新派に入団しました。ご縁ですね」と話します。お母様が芝居好きで、小学校に上がる前から帝国劇場や歌舞伎座に連れて行ってくれて、観やすいように一番前の真ん中の席をとってくれたそうです。そういう経験も役に立ったのでしょう。

こうして高校を卒業して新派に入団すると、徒弟制度のため、二代目水谷八重子に弟子入りしました。当時は1日に4～5公演あったので、息をつく暇もなかったといいます。

「主役の付き人でしたから、本当に大変でした。主役は1回の公演で何回も衣裳を変えるのでその度に着替えさせたり、師匠の出と引っ込みには、舞台裏でおかもち（お茶や煙草、化粧品、手鏡等が入った箱）とあいびき（椅子）を持って待機、師匠が舞台に出ているときは台詞のプロンプ。その間に自分も通行人や芸者等として出番があります。終演後は、師匠を楽屋から見送って掃除・洗濯後、自分の大部屋へ戻り、1日着用した自分の大量の衣裳を畳んで、白塗りを落として劇場を出ると終電間近。そんな日が1ヶ月間休みなく続きました。今は時代が変わって、1日1公演や休演日もありますが、当時はそのようなペースは考えられませんでしたね」と語ります。



舞台の一幕。一瞬たりとも気が抜けない

コロナ禍で未曾有の公演中止に絶望した日々

その後、娘役、主演などを経験した瀬戸さんは、2009年に日本俳優協会賞を、2011年には松尾芸能賞・新人賞を受賞します。新派の継承者として期待が高まる中、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が世界規模で起きました。

当時、瀬戸さんは、2020年6月に、小津安二郎監督の世界的にも有名な映画として知られる「東京物語」の舞台（脚本・演出：山田洋次）に出演予定で日々稽古をしていました。映画では原節子さんが演じた大役・平山紀子の役を演じるようになっていた瀬戸さん。気合が入るところではないくらいの気持ちで稽古をしていたところに、新型コロナウイルス感染



左：子どもの頃の瀬戸さん
中：マーチングバンドに夢中
だった高校時代
右：自主公演を終えてお客様
にご挨拶

症の流行によって突然の公演中止が決まります。

「自粛や自宅待機が続き、1年先までの仕事が、すべて中止かもしくは延期になりました。『東京物語』は4年後の2024年の1月に公演されましたが、当時は先が見えない状況にあって、毎日が不安でした。とても落ち込んでしまって、絶望感でいっぱいでした」

でも、先が見えない中でも、舞台をずっと待っていてくださるお客様がいます。ファンの方のために何かしたい、このままでは新派からお客様が離れてしまう……という不安と焦りが瀬戸さんの中に積もったといいます。ラジオやYouTubeなどを通じて、ファンの方と繋がる取り組みもしましたが、やはり芝居は「生」で観て感じるもの。リアルで繋がりたいという思いが募る毎日でした。徐々に感染防止の仕方がわかってきて、人と十分に距離を保ちながら、少人数でなら、きちんと換気された小規模な会場なら、と少しずつ条件は緩和されていく傾向がみられました。

ところが、通常の新派の芝居というのは、何十人ものキャストがいるのが当たり前で、俳優一人や二人で芝居が成り立つものではありません。演出家やプロデューサーに相談したところ、「今の状況でこれまでのような芝居は難しい」という意見でした。しかし、その中で出てきたのが「今まで芝居を観に来てくれたお客様でも、意外と新派の歴史については詳しく知らない。そういった方に届ける企画なら少人数でもできるのではないか」という声でした。

顧客との距離を開けない工夫をする

こうして、瀬戸さんが思いついた企画は、『カルチャー新派の魅力』と題して、新派の魅力を伝える活動でした。改めて新派の誕生の歴史や、新派三大悲劇の概略を説明し、ときには有名な決めゼリフを実演してみたり、台本の一部を抜粋して朗読劇とする企画です。まずは、瀬戸さんのご両親が経営する洋食屋で、地元でいつも応援してくれている馴染みのお客様に声をかけました。

「集まってくださるのかと不安でしたが計80名の方々がお越し下さいました。お客様からは、改めて新派というものを学べたというお声をいただきました。私が新派の歴史を説明しているなかで、突然、『切れるの、別れるのってそんなことはね……』なんて湯島境内が舞台となった泉鏡花の婦系図の台詞を言い始めたりするものだから、みなさん驚かれたりして!」

いつもは大きな劇場で遠くから芝居を観ているお客様が多かったので、役者の表情を間近で見られてよかったとか、台詞がよりよく聞こえるという声もあったそうです。「久しぶりに、リアルに人とお会いできる喜びを改めて感じる機会になりました」と瀬戸さん。自主公演は好評で、その後も東京の料亭やレストランで上演、2021年の12月までに10回以上、

開催しました。

お客様のためと思えば、一切、妥協をしない主義の瀬戸さん。自主公演では、何から何まで自分の目で見て選択し、確かめて行いました。台本の作成、音響、芝居の登場人物の関係が一目瞭然になるためのパネルの制作から、会場の下見、お花や衣裳の手配、レストランが提供する食事や飲み物の確認、席順も決めました。こうしてお客様の口コミが広がると、とある会社の社長から全国の中小企業の経営者向けに同様のイベントを帝国ホテルで開催してほしいという要望が来ました。

「地方にお住まいの方もいらしたので、オンラインとリアル
の併用の会になりました。オンラインのモニター中継というのは貴重な経験でした。たくさん
の制約がある中でも、新派の歴史・芝居を楽しみたいというお気持ちが嬉しかったです」



『カルチャー新派の魅力』の様子

コロナ禍を経て現在

現在、ライブ・エンターテインメント業界は、ようやく復活しつつあり、最近では、若い方たちも新派の芝居を観に劇場に足を運ぶ機会が増えているそうです。

「これまでに新派は江戸川乱歩の『黒蜥蜴』、推理小説として有名な横溝正史の『八つ墓村』や『犬神家の一族』なども公演しています。例えば大正や昭和の作品なら服や小道具、インテリア等のセットも当時のものを使います。これが若い方の目には『レトロでおしゃれ!』とうつるようです」

時代が異なるものを情緒的に、そしてリアルにさらりと削ぎ落として演じられるかが、新派の神髄だという瀬戸さん。ただ、瀬戸さんが演じることが多い役は、親によって結婚が決められていたり、家族のことで苦労させられたり、自分の意見があってもなかなか言えない時代の女性たちです。

昔と今で異なる価値観があったり、逆に時代を経ても変わらないものがあります。その違いを楽しんだり、かみしめたり。いろいろな楽しみ方ができる新派の芝居。

「せっかく観に来ていただいたからには、やはり心に響き、何か残るものがないといけないと思っています。そのような気概を持って、これからも伝統を継承しつつ、新しいものにチャレンジしていきます」

これまでのやり方に固執せずにそのときに最大限できる工夫を続け、顧客との距離を縮めることで新たな繋がりを作り上げた瀬戸さん。6月1日から三越劇場にて向田邦子作・石井ふく子演出の『花嫁～娘からの花束～』[🔗](#) が上演され、瀬戸さんは片倉雪子役として出演予定です。